



講演録 『子どもをとりまく 社会の現状』

速水 敏彦 先生
中部大学 人文学部心理学科

現代の子どもを取り巻く環境と心理について。

環境としてよく言われるのは少子化ですね。私は団塊の世代で、昭和22年生まれでたくさん同級生がいました。それに比べると今は子どもが少なくなってきました。また共働きが多くなり、親との接触が減ってきています。

加えてITの発達もあり、直接的なコミュニケーションも減少してきている。コミュニケーションが少なくなること、情動（情緒）が劣化し、人間関係が希薄化しています。

このような傾向の中で自尊心が低くなっているだけでなく、不安定になっています。つまり、確固とした自分の位置づけができていない子どもが増えてきているのです。

* YG性格検査がある大学で実施したところ、抑うつ・神経質・非協力的・劣等感の強い性格が

増えていることがわかりました。

一方で協調的な性格や思考的・外交的・攻撃的・活動的・支配性はだんだん弱くなってきました。簡単に言えば、このことから自信は減少してきたように伺えます。

私は、今の子どもや若者の自信が不安定なことが気になっています。

おとなしいひきこもりの人が突然、犯罪を犯す。親しい友人が少しミスをするとはひどく怒る。普通、犯罪を犯す人は乱暴なイメージがありますが、そうではない事件もできています。

家では横暴な子どもが学校では仲間はずれにあらう。いじめられる人が、別の場面ではいじめの側になることもある。最高と最悪がジェットコースターのように動く。

私は、若者が2つの顔をもっていると感じています。

先生に対しても平気で利己主義的に関わり、規範意識の低い

「膨張する自己」がある一方で、自尊心が低く自信のない「萎縮する自己」がある。その深層には共通する心性があるのではないかと思います。

2006年に出した著書『他人を見下す若者たち』はそういった点を中心に書きました。

自分以外を馬鹿にすることで、自分を持ち上げてなんとか自己保存を図ろうとする。そういう人たちが増えている。「自分は偉い」と位置づけ、先生を先生とも思わないような子どもが増えてきたという話もあります。

このことを、少し硬い言葉で「仮想的有能感」としました。定義としては「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向から習慣的に生じる有能さの感覚」、つまり偽りの自信です。

普通は成功体験によって肯定

感を得ますが、そうではなく、あいつはダメだと他者を低く見下す、低く評価することによって自分を持ち上げる感覚。

これはおそらく意識的ではなく、無意識的におこっているのではないかと思えます。他者評価を低めることで自己評価をあげる。しかし本物ではないので仮想的であると言えます。

これは、小学校の先生から実際に聞いた話なのですが、他の子の個別指導をしていると「先生、きて、きて」と呼び、先生がすぐ動かないと「無視かよ」と発言する子や先生に理科のモーターのつくりかたを聞いておいて、失敗したら「先生のせいでよ」と言う子がいるのだそうです。

この仮想的有能感の形成要因はいくつかあるのですが、まずは個人主義です。戦後、日本が西洋化し個人主義の考えが進行

しました。さらに、個人主義を曲解して利己主義が広がっています。

次に格差社会。格差が広がる中でなんとか勝ち組に残りたい。その中で他者を見下して自分を保持するという心性が強くなっています。

それに、簡単に他人を批判できるとなったネット社会やマスメディアの発達があります。それなりの地位にある人が汚職をしたり、不当な発言をしたという報道が日常的にある。

それを我々は外から眺めて、「馬鹿なやつだな」と言っている。そういった点でニュースを聞いてみると、相手の悪い行動の要因は相手自身の中にあるという考えがどうしても強くなっています。

さらに絶対評価も、その要因ではないかと考えています。成績評価の際、新しい学力観がでてくる中で、昔の相対評価では

※ YG性格検査

矢田部ギルフォード性格検査の通称。質問紙形式の性格検査の一種である。

ジョイ・ギルフォードが作成したギルフォード性格検査をモデルに、矢田部達郎らが日本版として作成した。

